

# 報 告 書

平成 23年12月 21日

岡山県議会議長 河 本 勉 殿

議員氏名 佐藤 真治

派遣の概要は次のとおりでした。

1. 目 的 第11回都道府県議会議員研究交流大会出席
2. 派遣場所 東京都千代田区都市センターホテル
3. 派遣期間 平成23年11月16日 ～ 平成23年11月16日

## 【 報告事項 】

私は、7回目までは、連続して出席させていただいていたが、議会と議会の合間にも委員会を開催して、事前審査制をとる岡山県の議会日程と合わないため、しばらくご無沙汰していた都道府県議会議員研究交流大会の第11回に出席した。正直なところ、全国都道府県議会議長会が、今回の研修会を開催した意図が、いま少し分からない。

この時期にすると決めているから、するのだろうか。

第7回の私自身の報告書に、『この大会を通じて、議会活性化等の様々な提言が行われてきており、地方制度調査会等の議論に、かなり反映されている。二元代表制の一方を担う地方議会として、執行機関の監視機能に加えて、透明性の向上や政策提言機能の強化など、議会改革への思いが、毎回確認される。』と書いているのだが、基調講演といえば、片山元鳥取県知事に、厳しい言葉を頂戴していた印象があるが、かなり強い刺激を受けては来た。

しかし、今回は、際立った印象と言うものが薄く、それだけ期数を重ねるうちに、己の感性そのものが鈍っているのだろうと、少しさびしい気持ちにすらなった。

主催者挨拶の後 基調講演の講師は、「平成宰相論～総理大臣の『資格』とは何か?～」と題して、加藤清隆・時事通信社解説委員長。時事放談ではないが、これだけ自由に、のびのびと発言できると楽しいと思う。ただ、全国議長会の主催の研修会の内容としては、国政に偏っていたのではないか。もちろん、最大会派の自民党議員が議長になることが多いため、勢い、議長会も、自民党食が強いことについては、私も、それを喜ぶべき自民党所属の議員ではあるが、あまりにも政府・民主党批判が過ぎたように思う。特に、品格を問われる個人的な批判については、議員研修の基調講演としては、ふさわしくない。こうした講演を楽し

める場、勉強にする場、適切な場は、いくらも他に、あるのではないか。



そもそも、中央では野党になった自民党地方議員の日ごろの不満のガス抜きには、確かに面白いけれども、国政については、我々の成すべきことは限られており、東京くんだりまでのこのこ出てきた自民党地方議員は、地方議会に対して、辛辣な内容を含む罵倒を浴びせられたほうが、より勉強になると思う。

少なくとも、宰相の資格を①洞察力、②大局観 ③歴史観、国家観 ④長期ビジョンと挙げられても、これが、議会機能の充実と活力に満ちた地域づくりという開催趣旨にどう合致するのか、私には分からない。タイトルからして、ずれているのではないか。

一方で、分科会は、第5分科会で、「議会の政策形成機能強化の取り組みと大学・研究者との連携」に参加した。



岡山県においては、包括協定ということでは、岡山商大さんと新庄村の例があるが、議会と大学ということになると、極めて新しいテーマである。もちろん、産学官連携ということならば、TLOなどはあるが、大学コンソーシアムも、社会科学系、とりわけ地方行政ということになると、まだまだ双方からのアプローチが必要であろう。

なにより、イギリス議会政治史などは、どの大学でも、大きなテーマであるが、生々しすぎるのか、語るに足りないからなのか、岡山県政治史のような地方政治史というのが、軽視されているように思う。大学にも、知り合いの方はいるが、県内の大学の研究者や学生の方々から、議会について、議員について、直接の調査を受けたことはないし、こちらも頼んでいない。思えば、なんともったいないことであろうか。

あるいは、行政の審議会や新聞のコメンテーターとして、特定の大学関係者の方が頻繁に登場されることはあるが、概して、大学関係者は、議員を知らないし、議会に対しては、侮蔑的でもあり、不幸な関係が続いていると思う・・・と感じてしまうことが、不幸である。

こうした中、分科会では、先駆事例と思しき、話があった。別紙の通りである。ただ本当

に先駆事例なのか？という疑いも、持っている。分科会をなにか都道府県ごとに振り分けていないかという懸念を感じるほど、私は、もはやすれてしまっているのだ。

ただ、基本的には、地方の最高学府を出た人間、いわば地場のエリートが、地方公務員になるわけであるが、双方のメリットを考えても、行政と大学を対等・協力で結んだ方がはるかに、合理的だとやはり思ってしまう。すなわち、「『行政』の政策形成機能強化の取り組みと大学・研究者との連携」というタイトルのほうが、腑に落ちる。

議会サイドからは、むしろそちらを提言したい。大学コンソーシアムという言葉には、人文科学系はもとより、自然科学系でない社会科学系の産学官連携もあると考える。

ともあれ、当面は、大学の先生をお招きして、お話を伺って、議会が勉強会を開催するというのが、考えられる連携であろう。しかし、これは決して、対等・強力な「連携」ではないように思う。二元代表制の一翼がこれでは、とても勝負にならない。

一方で、議員選挙など誰でも立候補できるのに、特殊な人種に追いやって、研究者自身が選挙に出るという実践経験があまりなく、それでは現場を知らない机上の空論であるという誇りを受ける可能性もあるし、ただ賢い議員は議員で、象牙の塔に籠ることなく、自分で勉強、研究するか、徹底的に現場に行くであろうから、研究者と実践者は、役割がそもそも違うのかもしれない。

もっといえば、議会や議員が研究の素材にすらならないほど、研究者からは、つまらないシロモノなのであろうし、議会からすれば、理屈だけでは事は進まないという、開き直りにもなる。

あるいは、山形のように、学生のインターンシップとして、議会と連携するというこのの方が、おこがましいが、成熟した市民の育成、住民参加という観点からは、より現実味がある話だと思う。もっとも、学生の囲い込みということについて、政党の政治的意図が関与しないという工夫が必要だと思う。政治ではなく、むしろ、ていよく選挙のボランティア要員にされているような実態があるように思えるにつけても。

一方で、議会事務局機能の条件整備と大学・研究者との連携という提起もなされたが、これは二段とびの議論のような気がした。少なくとも、議会事務局の権能強化というのは、本気で議論するならば、本籍＝知事部局、現住所＝議会事務局という現状からして、採用から含めて別仕立てで考えるべきテーマである。

いきなりだなという感じがした。

それにしても、分科会が、「災害と議会活動」「議会の監視機能の強化」「議会の政策立案機能の強化」「議会と住民との関係」「議会の政策形成機能の取り組みと大学・研究者との連携」であるが、こうして議会の権能を高めることこそが改革と捉え、真正面から改革という言葉が、あまりないのが、現状の議会の問題点そのものである。これで東京出張から帰ってきて良いのだろうか、という気持ちになった。

過去の議員研究交流大会では、ここまで思わなかったが、全国から都道府県議会議員が集まる研修として、こういうスタイルが、今後も好ましいのだろうか。ましてや、この会で、他都道府県の議員と交流を深めたことなどなく、むしろ、各議会の塊で話を聞いて、東京で親睦を図る要素のほうが強いように思う。